



学生の主体的活動を軸とした授業づくり : 2021年度 A短期大学における実践報告

星川, 佳加
井下, べに
高砂, 朋子
代田, 盛一郎

(Citation)

研究論叢, 29:67-75

(Issue Date)

2023-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482761>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482761>



学生の主体的活動を軸とした授業づくり

—2021 年度 A 短期大学における実践報告—

星川 佳加・井下 べに・高砂 朋子・代田盛一郎

(大阪健康福祉短期大学)

はじめに

A 短期大学子ども福祉学科は、大阪府堺市の指定保育士養成施設であり、幼稚園教諭教職課程も設置している。本学科では、他者との協同を含め教師・保育士として必要な資質能力の基礎を養うことを目的とした大学独自科目「保育基礎ゼミⅠ・Ⅱ」を開講している。初年次教育の一環として、1 年生前期に「保育基礎ゼミⅠ」、1 年生後期に「保育基礎ゼミⅡ」が開講される。

従来、本科目では教員が課題を設定し学生に取り組ませていたが、2021 年度は「保育基礎ゼミⅡ」の内容と方法を大幅に変更し、学生の主体的活動を軸とした授業づくりに取り組んだ。本稿ではこの実践について報告する。

なお、本校執筆にあたり学生には「レポート・コメントカード・アンケート等の研究使用許諾のお願い」を配布し、許諾の署名を得ている。

1. 「保育基礎ゼミⅡ」の講義概要

「保育基礎ゼミⅡ」の受講者（2021 年 10 月履修登録時点）は、1 年生 A 組 23 名、B 組 27 名の計 50 名であった。担当は従来通り 1 年生ゼミ指導教員 4 名で行った。「保育基礎ゼミⅡ」のねらいは「グループワークを中心に、保育の基礎的な知識・技能を獲得し、学習成果を発表したり、実習に活かしたりすることができる」とした。その内容と方法について、2021 年度前期末に学年教員で検討を行い大幅に変更し、学生の主体的活動であ

る「プロジェクト活動」を軸とした。詳細は後述する。

「プロジェクト活動」開始前には、学生同士の関係構築を促すため「クラス活動」を設定した。両クラスともクラスリーダーを中心に学生同士で話し合い、ダンスに取り組んだ。「クラス活動」の最後に、クラスごとに活動の成果を発表し合う機会を設けた。10 月末の全学交流会に参加可能な学生はその場で発表も行った。

また、例年通り 2 年生の「総合表現発表会」と「卒業研究発表会」の参観を組み入れた他、2 年生教員の要請を受け新たに「保育教職実践演習」への参加（模擬保育における子ども役）を 2 コマ追加した。「総合表現発表会」での劇鑑賞は対面で行うことができたが、「卒業研究発表会」は新型コロナウイルス感染拡大を受けオンラインでの実施となり、1 年生は 2 年生のオンライン発表会の録画をオンデマンドで視聴した。

表 1. 講義計画表（修正版）

回	テーマ・内容
1	オリエンテーション
2	クラス活動①
3	クラス活動②
4	クラス活動③
5	クラス活動④（発表会）
6	プロジェクト活動①
7	プロジェクト活動②
8	プロジェクト活動③
9	プロジェクト活動④
10	2 年生 保育教職実践演習 参加

11	2 年生 保育教職実践演習 参加
12	プロジェクト活動⑤
13	プロジェクト活動 成果交流会
14	2 年生 総合表現発表会 鑑賞
15	2 年生 卒業研究発表会 参加

受講単位について、「クラス活動」はクラス別で行った。「プロジェクト活動」は両クラス混合で希望する活動内容に応じて小グループを編成した。「保育教職実践演習」への参加はクラス別、「総合表現発表会」の参加は合同で行った。「卒業研究発表会」は合同で実施（両クラスとも共通の発表会動画を視聴）した。

2. 「プロジェクト活動」の背景と進行

(1) 「プロジェクト活動」導入の経緯

例年「保育基礎ゼミⅠ・Ⅱ」では、教員主導のもと全学生が同一の内容に取り組んできた。2021 年度前期の「保育基礎ゼミⅠ」では、新型コロナの影響を受け授業内容・方法の変更を余儀なくされながらも、名札の作成と発表、絵本の選び方（図書館の利用方法の説明含む）、学年交流会に取り組んだ。また、これまでの「保育基礎ゼミⅡ」では手袋シアターの作成と発表、絵本研究と発表（読み聞かせ）、乳児院・児童養護施設に関するレポート執筆と発表、1 年次の振り返り・2 年次の課題設定と発表等が実施されてきた（2019 年度後期「保育基礎ゼミⅡ」参照）。

しかしながら、2021 年度後期「保育基礎ゼミⅡ」の講義計画を立案するにあたり、9 月冒頭に以下の 5 点の問題提起がなされた。

- ①今年度は新型コロナの影響で、前期に予定していた内容を消化し切れていない。
- ②後期も新型コロナの影響を受ける可能性は大いに考えられるため、密の

回避、自宅課題への振り替え等を念頭に置きながら授業計画を立てておく必要がある。

- ③「ゼミ」の特性上、多様な内容や授業形態、教育方法が考えられる。
- ④前期末に企画した学年交流会の場面では、多くの学生において、自分の得意なこと・選んだことに対して主体的に活動する姿が見られた。
- ⑤今年度は入学直後から自宅課題、オンライン授業への切り替えを余儀なくされ、前期末の時点でも人間関係に不安を抱える声が聞かれる。例年以上に、学生同士の関係づくりも含めて支援する必要がある。

「2021 年度 保育基礎ゼミⅡに関する
ご相談（修正版）」
(文責：星川、2021.9.9) 参照

以上の問題意識から、2021 年度後期「保育基礎ゼミⅡ」では内容と方法の大幅な変更を行い、「プロジェクト活動」を授業の軸として取り入れることが提案された。

ここにおける「プロジェクト活動」とは、学生自身に取り組みの内容を選択してもらうことで学生の主体的な活動を励ますとともに、少人数グループでの活動を通して学生同士のつながりの構築や深化を目指すものである。少人数での活動が基本となるため、対面授業の機会を保障しながら、いわゆる「密」(多数の学生が一つの空間に長時間とどまる)の状況を回避することができる。また、プロジェクトの活動内容によっては、分散登校や自宅課題にも比較的スムーズに対応できると考えられる。さらに、人間関係に不安を抱える学生に対しては、安心して活動できる場所を用意する等、具体的な配慮を行うことができる。

こうした「プロジェクト活動」の特徴から、1 年生ゼミ指導教員 4 名で協議した結果これ

を 2021 年度後期の「保育基礎ゼミⅡ」に取り入れることは妥当であると結論付けられた。

（２）「プロジェクト活動」の進行

「プロジェクト活動」の内容については、過去に「保育基礎ゼミⅠ・Ⅱ」で取り組んだ内容を土台とすることが妥当であると考えた。例えば先述した、手袋シアターづくり、絵本研究、乳児院・児童養護施設に関する調査、壁面制作、手遊び等である。一方で、2021 年度の学舎移転に伴う恵まれた環境を活用し、学内の環境づくりや、作物の栽培、動物の飼育、ダンスや音楽（音や動きを伴うもの）等、様々な新しい活動も実現可能であると考えられた。また、「保育基礎ゼミⅡ」を担当する学年教員の専門性に応じた活動内容であれば、学生の活動をより積極的に支援できる。

これらの検討をふまえ、各教員が２項目ずつ活動を提案し、学生に希望する活動を選択してもらったアンケートを実施した。2021 年度「保育基礎ゼミⅡ」では、「野外活動」「ウッドクラフト」「絵本研究」「保育教材研究（手袋シアター等）」「音楽演奏活動」「音楽あそび研究」「身体表現活動」「美術表現活動」の 8 つを候補として学生に提案した。また、8 項目のなかに取り組みたいと思う活動が無い場合は、自由に希望する活動を記述できる欄を設定した。

アンケートを実施するにあたり、学生には以下のように呼び掛けた。

- ・大学生の間に、どんなことに取り組んでみたい？
- ・一度でいいから、思いっきりやってみみたいことは何？
- ・今の自分は、何をすることが楽しい？何をしている時が幸せ？

・子どもの頃、大好きだったこと、夢中になったことは？

・誰かと一緒になら挑戦できるかも…と思える活動はある？

みんなの「挑戦してみたい！」「夢中になって頑張りたい！」を一緒にかなえましょう！

「2021 年度保育基礎ゼミⅡ
プロジェクト活動に向けて」
(2021 年 10 月配布授業資料) 参照

ほぼ全員の学生から速やかにアンケートの提出を受けることができ、教員が候補として挙げた活動以外にも、学生から積極的な提案が寄せられた。また、人間関係に対する不安等もアンケート及びその前後の聴き取りを通して捉えることができた。

アンケート集計と教員の話し合いの結果、「野外活動」「保育教材」「音楽演奏」「DIY」の 4 つの大グループを構成し、教員 4 名が各グループの担当を受け持った。活動に際しては、必要に応じて大グループの中でさらに少人数のグループに分かれた。

「野外活動」グループは、新しい学舎の環境を生かし中庭での活動を提案し実践したり、短大近隣の公園に校外学習に出かけたりした。「保育教材」グループは、紙芝居や積み木など、小グループごとに作りたい作品を考えて制作に取り組んだ。「音楽演奏」グループは、メンバーで演奏したい曲を相談し、プロジェクト活動の成果交流会に向けて練習を行った。「DIY」グループは、大学敷地内にオープン予定の地域交流スペース兼カフェに授業への協力を依頼し、施設内で使用するイスの製作や、壁のペンキ塗り等を経験させていた。いずれの活動も、保育や幼児教育の現場において活かすことのできる能力を育成することにつながった。

なお、学生自身に活動を自覚的に進めて欲

しいという願いと、教員が学生の活動状況及び出欠状況を確認、共有するという目的で、各回、小グループごとに「プロジェクト活動報告書」を求めた。「プロジェクト活動報告書」は、プロジェクト名、メンバー、活動日時、活動内容、感想・反省、次回の活動計画の6項目から構成されるA4用紙1枚のプリントである。この「プロジェクト活動報告書」は、「保育教材」や「音楽演奏」のグループでは有効に活用されたと考えられる。活動後に報告書を作成することで、学生は自分たちの現状と今後の見通しを確認することができ、主体的に活動を進めることができた。一方「野外活動」や「DIY」は、毎回手書きによる報告書を作成し提出することが、活動の特性と合わなかった。学生が活動を振り返り今後の見通しを持つ方法、教員が学生の活動状況を把握し共有する方法については、今後改善が必要である。

「プロジェクト活動」の最終回には、小グループごとに取り組んできた活動を発表し合う交流会を設定した。「音楽演奏」グループは合唱と合奏、「保育教材」グループは小グループごとに作品紹介を行った。「野外活動」「DIY」グループはそれぞれ活動中に撮影した写真や動画を使用してスライドショーやポートフォリオを作成し、発表した。グループ内の学生同士で協力して発表に取り組む姿が見られると同時に、他のグループの発表にも関心を寄せる様子が見られ、学生間の交流の深まりと広がりが感じられた。

続いて、成果交流会に向けた全5回の「プロジェクト活動」における学生の様子について、「音楽演奏」グループの事例に焦点をあてて振り返る。

(3) 学生の様子～「音楽演奏」グループの事例をもとに～

「音楽演奏」グループでは、楽器演奏経験

者と未経験者の学生で構成されていた。学生が主体となって選曲から練習計画、本番の構想について話し合い、必要に応じて授業終了後も自主的に練習を行い、発表本番に向けて計画的に準備を進めていた。学生が取り組む様子の経過について述べていく。

はじめに音楽演奏をしていくにあたってどのような形態で演奏するか話し合わせ、「小グループには分かれずグループ全体で演奏したい」という希望があがった。そのため選曲する際には、メンバーの好きな曲や思い出の曲であることとそれぞれの楽器を演奏することができるかということが重要視された。演奏経験のある者は、中高での部活動として参加した、または授業の一環で経験した「元吹奏楽部メンバー」や「軽音楽経験者」、「邦楽経験者」、個人的な習い事での「ピアノ経験者」であったため、箏などの和楽器も参加可能なアンサンブル曲が選ばれた。未経験者については、簡単な楽器であれば演奏可能であることから保育楽器での参加、指揮者としての参加が主となった。また、話し合っているうちに「歌も歌いたい」という要望が出たため、発表時期であるクリスマスソングが選曲された。

ここで問題となったのが楽器の調達とアンサンブル曲の楽譜選定についてである。楽器の調達に関して、元吹奏楽部メンバーは、自身が所有する楽器を持参することが可能であったが、「軽音楽経験者」や「邦楽経験者」は所有楽器がないため、学内にある楽器を利用する、または楽器レンタルサービスを利用することが必要となった。アンサンブル曲の楽譜選定については、既存の楽譜には多人数で演奏することを前提として演奏者パートが多く設定されており、また、実際演奏する楽器と楽譜内で設定されている楽器に違いがあったため、既存の楽譜からアレンジしたり、移調楽器用に移調したりする必要があった。

学生は、担当アドバイザーに助言を求めながら、楽器編成や移調楽譜の作成に取り組んでいた。

演奏楽器や楽譜など、演奏に必要なものが揃った段階から、個別およびパートごとの練習へ取り掛かった。楽器アンサンブルでは、箏を演奏する学生が2名いたが、そのうち1名は箏の演奏に興味を持った未経験者だった。経験者から演奏の仕方や邦楽楽譜の読み方を学び意欲的に練習していたが、発表会までの授業回数が未経験者にとっては少なかつたため苦戦している姿が見られた。

一定の個別練習期間の後、徐々に全体練習が増やされていった。初めての全体練習後には、合奏の難しさについての感想があがった。吹奏楽器担当者は、ブレスの関係上緩やかな速度での演奏が難しく、その一方で箏担当者は初心者も含んでいたため、速い演奏は不可能であった。そのため両者が演奏可能な速度を模索しつつ、演奏の様子をビデオ撮影し、演奏を改善するための意見を出し合いながら、発表会当日まで積極的に進めていく姿が印象的であった。学生からの感想からは、「できないところがあっても諦めずに取り組むことのできる人たち」であると、お互いの努力を認め合い、「何回も（練習を）重ねることによってだんだん上手いこと合わせてこれて本番も頑張ろうと思いました。」と、充実感と共に本番に向けての意欲を高めていたことがわかった。

3. 「プロジェクト活動」を終えて

今回「保育基礎ゼミⅡ」に「プロジェクト活動」を取り入れるにあたり、学生が活動することの楽しさを実感し各種活動の方法を体得すると同時に、例えば以下のような効果が期待されたと考えた。

①グループで活動することを通して、

より多様なつながりを構築するとともに、自分とは異なる他者と協同する機会となる可能性がある。

②テーマは教員から提案するほか、学生自身にも考えてもらうことで、より主体的な活動が見込まれる。また、教員が思いつかないテーマを発見し、学年全体の学びを深めることができる可能性がある。

③活動に加え、報告書の作成や活動成果の報告会等に取り組むことで、文章を書く力、他者に自分の考えを伝える力などが育まれる可能性がある。これは2年時の「保育研究ゼミ」等他科目の学びにもつながり得る。

「2021 年度 保育基礎ゼミⅡに関する
ご相談（修正版）」
(文責：星川、2021.9.9) 参照

一つ目の効果については、十分に確認できたと考えられる。授業後学生に実施したアンケートにおいて、「ほかのクラスの子とも仲良くなれ、完成までに時間はかかったけど楽しかったです。」「クラスが違う子たちと協力することはあまりないからいい機会だと思いました」「一つのことに協力して取り組む経験は保育の現場に行った時役に立つと思った」「大好きな音楽を、同じく音楽が好きな人たちと一緒に協力して一つの曲を作り上げていくことがとても思い出に残りました。大変ではあったけど、みんなそれぞれ自分の楽器と向き合えたと思います。」等の回答が得られた。教員間の情報共有でも、普段あまり関わることの無かった学生同士が意見を交換したり、協力しあったり、励ましの声を掛け合ったりするなどの姿が見られたことが報告された。

学生同士のつながりや協同の質についてはさらなる深まりが期待されるが、普段から仲

良くしている友人とは異なる学生とのつながりが生まれたこと、あるいは普段から仲の良い者同士であってもこれまでとは異なる関わり合いがもたれたことに、意義があったと考えられる。

二つ目の効果についても確認することができた。例えば、「保育教材」グループで段ボールを用いた「ガチャガチャづくり」に取り組んだある学生は、「プロジェクト活動」について「とても良い」と回答し、その理由として「みんながあまり作らないであろうガチャガチャを作れたから！発表の時も先生方や友達が喜んで回してくれたし、クラスの子たちもやっていい？って参加してくれてとても嬉しかったから。作る時も、A（仮名）とK（仮名）で協力して出来たから楽しかった！」と記述した。このグループの学生は、1年生当時座学の授業で主体性を発揮することが難しく、一部の教員からは授業態度に問題があると指摘されることもあった。「保育基礎ゼミⅡ」においても、当初は計画的に活動を進めることが難しく担当教員も心配しながら見守っていた。だが、最終的には主体性を発揮して作品を完成させ、達成感を感じるに至った。

また、「ガチャガチャづくり」というテーマは、学生の生活から生み出されたものであり、教員の発想では出て来なかったのではないかと考えられる。幼児教育や保育において自然との触れ合いや運動遊び等を価値づける立場にたてば「ガチャガチャ」が「保育教材」として適切かという疑問も想定される。だが、保育実践は子どもたちの生活に根ざして構想されるべきであるという立場に立てば、「ガチャガチャ」は立派な保育教材であるということが出来る。さらに、少なくとも身近にある素材を使って「ガチャガチャ」を作るという活動は、「保育教材」を作る技術を明らかに向上させたと考えられる。このグループの

作品である「ガチャガチャ」は、実際にレバーを回すと玉が出てくるよう精巧に作られていた。この仕組みを学年での交流会で発表した際には、他のグループの学生から感心する声が聞かれた。

一方で、学生の希望するテーマを実現し主体的な活動を支えるためには、いっそう設備や環境を整備することが重要であると考えられる。「音楽活動」グループの事例で述べた通り、学生の主体的な活動を支えるために、楽器のレンタルや楽譜のアレンジが必要となった。また、「DIY」グループの活動は地域交流スペース兼カフェの方々にご協力いただくことで実現することができた。今後も学生の主体的な活動を軸とした授業を展開する際は、地域等学外との連携を含め、大学として設備や環境をできるかぎり整えていく必要がある。

三つ目の効果については、十分に得られなかった。特に「プロジェクト活動」を通して「文章を書く力」を向上することは難しかった。一方で、報告会においては演奏や実演、スライドショー、ポートフォリオ等様々な形態の活動報告がなされ、活動の総括や発表の形式に文章表現以外の方法が有りうるという気づきを教員として得ることができた。

また、文章表現の土台となる豊かな外的及び内的経験については、他の科目以上に保障できたのではないかと考えられる。「野外プロジェクトグループでしか体験出来ないこと、例えばカフェを作ったり、クラスの小さな看板を作ったりなど楽しいことばかりでとても良かった。」「自分達でカフェの壁を塗ったり椅子を作ってだんだん完成していくのが嬉しくて横を通る度にワクワクしていました。回数を重ねるごとにドライバーが上手になったりカフェの2人と仲良くなったりして嬉しいことだらけでした。今も完成してカフェに入った時は嬉しくなります。」等の感

想に、それぞれの学生が唯一無二の経験をしたことを読み取ることができる。

4. 「プロジェクト活動」に対する学生の評価

大学独自科目において「プロジェクト活動」を導入するのは初めての試みであったため、これが学生にどのように受け止められたのかを確認し、より学生の学びが深まる活動となるよう改善していく必要があると考えた。そこで、2021 年度末に「保育基礎ゼミⅠ」及び「保育基礎ゼミⅡ」のなかで実践した活動について、学生にアンケートを実施した。各活動に対して「①とても良い」「②良い」「③どちらかというが良い」「④普通」「⑤どちらかというが悪い」「⑥悪い」「⑦とても悪い」「⑧その他」の選択肢を用意した。

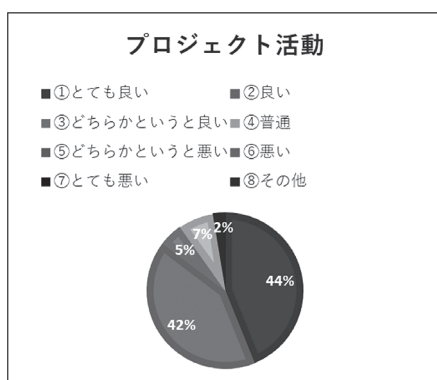


図1. プロジェクト活動に対する評価

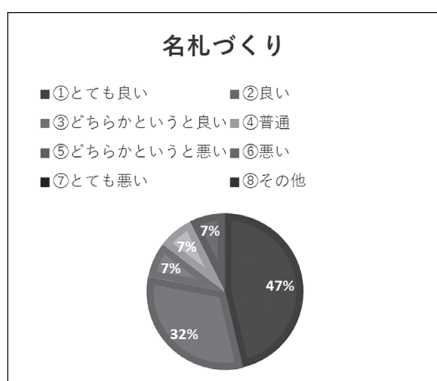


図2. 名札づくりに対する評価

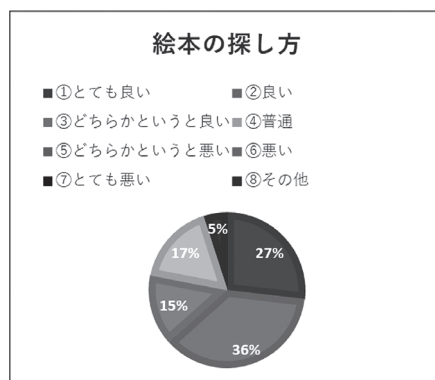


図3. 絵本の探し方に対する評価

アンケート結果は図のとおりである。学生の主体的活動を軸として行った「保育基礎ゼミⅡ」の「プロジェクト活動」に関する結果のほか、比較のため「保育基礎ゼミⅠ」において教員から活動を提案し実施した「名札づくり」「絵本の探し方」に関するアンケート結果も併記する。

この結果からわかる通り、活動に対して「とても良い」「良い」「どちらかというが良い」と答えた学生の総数は、「名札づくり」(86%)や「絵本の探し方」(78%)に比べて「プロジェクト活動」(91%)の方が多。9割を超える学生が「プロジェクト活動」を肯定的に評価したことは特筆に値する。

また、「プロジェクト活動」に対しては「どちらかというが悪い」等のネガティブな評価をした学生が0人である点にも注目したい。2021 年度は年度開始早々に自宅課題・オンライン授業への切り替えを余儀なくされたこともあり、2021 年度入学の学生からは様々な不安や不満の声が聞かれていた。こうした状況の中で「プロジェクト活動」に対して否定的な評価がなされなかったことの意味は大きいと考えられる。

一方で、「プロジェクト活動」に対して「普通」と回答した学生からは、「特にやりたいことも無かった」「違うことをやればよかった」という感想も提出された。「悪い」と評

価するほどではなかったものの、活動内容に満足できなかったことが伺える。学生のやりたいことを大学の教育の中でどこまで、どのように実現することができるのか、さらなる検討が必要である。

おわりに

2021 年度後期に開講された「保育基礎ゼミⅡ」の「プロジェクト活動」では、学生から取り組みたいことを聴き取り、学生の希望する活動を軸としてクラスの垣根を越えたグループを編成し、教員はアドバイザーとして活動を支えた。各グループにおいて学生たち自身が具体的な活動を設定し、協同して進行する姿が見られた。授業の最後には各グループの活動成果を交流する会を設けた。グループ内で学生同士の関係構築が進むと同時に、他のグループの良さを発見し伝えあう姿も見られた。学年全体に楽しく安心できる雰囲気醸成することで、他科目も含め登校意欲や学習効果の高まりも感じられた。学生の主体的な活動やモチベーションを可能な限り支えるための設備や環境整備の重要性にも改めて気づかされた。

こうした取り組みの土台には、2021 年度前期に開講された「保育基礎ゼミⅠ」に対する反省があった。2021 年度前期「保育基礎ゼミⅠ」では、新型コロナウイルスの影響を受け自宅課題・オンライン授業の導入を余儀なくされた。自宅課題で「名札づくり」を進め、オンラインで名札の発表会を実施した。人によって裁縫の得手不得手があるなかで全ての学生に「名札づくり」の自宅課題を課してしまい、裁縫が得意な者にとっても、苦手な者にとっても、良い学びの機会を提供することができなかった。対面授業再開後は、夏に実施される保育実習Ⅰaを想定して「絵本の探し方」のレクチャーを行った。学生も実習に向けて準備をする必要があったため比較

的熱心に受講していたが、他者との協同を含めた教師・保育士として必要な資質能力の基礎が養成できたかという点には疑問が残った。

2021 年度前期末、例年 4 月に実施している学科での新入生交流会が中止となったため、「保育基礎ゼミⅠ」のなかで学年交流会を実施した。学年交流会とそれに向けたクラス活動では、多くの学生が自身の好きなことや得意なことを活かして主体的に活動する様子が見られた。また、普段仲良くしているグループやクラスの違いを超えて、声をかけあったり一緒に写真を撮ったりと、積極的に交流する様子が見られた。

後期の「保育基礎ゼミⅡ」に向けた準備を進めるなかで、新型コロナの影響が引き続き考えられる状況で授業が自宅課題やオンラインに変更となる可能性も想定しつつ、どの学生にとっても豊かな学びを保障できる授業の構想が必要ではないかと考えた。その際、それぞれの興味や得意を生かしながら学年交流会にかかわる学生の姿が手掛かりとなった。学生自身が学びたい、やってみたいと感じ主体的に活動できるとともに、「保育基礎ゼミⅠ・Ⅱ」の目的である保育の基礎的な知識・技術の獲得につながるような授業内容を構想することが、学生の豊かな学びにつながるのではないかと考えた。

このように、大学の一科目においても計画・実践・評価・改善を通してより良い授業を追求することは重要である。また、大学教育においても教員が学生の姿から授業を構想することは必要なことである。2021 年度「保育基礎ゼミⅡ」を受講した学生たちの姿や声から、その重要性和必要性を改めて知ることができた。

大学教育において「主体的な学び」が求められるようになって久しい。本稿は実践報告のため「主体的」「学び」等に関する十分な

検討や概念規定は行っていないが、学生が「やってみたい」「楽しい」と思える活動に対して自ら積極的に関わること、またこうした活動を通して他者と関わり合い、変容していくことを捉えることができた。学生の主体的な活動を軸とした授業づくりは、大学教育においても一定の有効性を持つものと考えられる。

大学独自科目は他の科目と異なり学習内容が詳細に規定されているわけではない。そのため、学生自身の学びたいこと、取り組みたいことを実現する可能性を持っている。今後こうした機会を活用し、学生の主体的な活動や学びを応援していきたい。

謝辞

2021 年度「保育基礎ゼミⅡ」において学生の主体的活動を軸とした授業づくりを実践するにあたり、A 短期大学の教員の皆様、教務をはじめ事務職員の皆様に、お力添えをいただきました。大学には、学生の主体的な活動にかかる費用についてご理解とご支援をいただきました。地域交流スペース兼カフェの皆様、楽器店の皆様にも大変お世話になりました。また、学生の皆さんには積極的に授業に参加していただくとともに、本稿執筆にあたりレポート・コメントカード・アンケート等の研究使用について許諾していただきました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。